

人を動かすのは
うれしい、おいしい、たのしい”



富山市長
森 雅志 (もり・まさし)
1952年富山市生まれ。富山県議を経て2002年、旧富山市長選で初当選を果たす。'05年の合併以降も市長を務め、現在通算五期目。

公

公共交通を軸としたコンパクトなまちづくりを政策として掲げる富山市。こうした新しい街のあり方は、欧州などでいち早く採り入れられてきたものだが、富山市の見据える未来像は、これから我々が直面するであろう少子

高齢化時代を踏まえた「富山型コンパクトシティ構想」となっているのが大きな特徴だ。「お年寄りの気持ちをサポートするものにするには、やはり外出機会をつくるのが第一。街を歩く人と会う、お話をする。そういう機会をたくさんつくってもらうことが地域の活性化につながり、そして環境未来都市の成果にもつながる。そういう思いでさまざまな仕掛けをつくってきました」

そう語る森 雅志・富山市長。富山市では高齢者が街へ出やすくなるよう路面電車、バスなどの割引制度も用意している。これは65歳以上を対象に利用料金を市内中心地で降りたときのみ、1回1000円とするというものだ。

「1回1000円だとうれしいし、気軽に利用したいと思うようにもなるでしょう。富山市の高齢者人口は約10万人ですが、この制度は1日平均で2500人以上が利用しています。つまり2・5%の高齢者が毎日外出しているということになるわけです。ここでのポイントは中心市街地で降りたときのみ割引になるということです。結果、市街地商店街も元気になる」

祖父母が孫と外出する際、動物



北陸新幹線の開通にともない、街の玄関口として大きく発展した富山駅。2019年に予定されているライトレールと市内電車の接続によって、利便性がさらに高まる。

園や博物館など公共施設の利用料を無料にする「孫とおでかけ支援事業」も、たいへん好評だ。「お爺ちゃんお婆ちゃんもうれしいし、アイスクリームを買ってもらって孫もうれしい。外出機会を増やすことは元気な高齢者をつくることにもつながりますし、家族の結びつきも再構築できる。去年、この話をマルセイユのOECD会議でしたところドイツのシュトゥットガルト市長から「入場料の穴埋めはどうやってするのか」と訊かれましたが、穴埋めはしなくていいんです(笑)。それ以上に飲食や遊具などの売り上げが上がり、富山市全体も活性化していく。そのことはデータでも証明されています。そうやって富山市は人も街も元気になってきたんです」



公共交通で暮らせるコンパクトな街に

2005年の合併により、富山県のおよそ3割の面積を占めるようになった富山市。その富山市でいま、市街地を中心としたコンパクトなまちづくりが進行中だ。環境に配慮した未来志向のまちづくりは、目の前に迫った高齢化社会だけでなく、「未来のために富山市はいかにあるべき」という課題も踏まえつつ、圧倒的なスピード感で進んでいる。

TOYAMA
C I T Y

3つを核にした地方都市の未来像

これからの地方都市は、どのようなマスタープラン、仕組みのもとに作られるべきなのか。富山市の核となる3つの手法を見てみよう。

「1」公共交通を軸としたコンパクトな、まちづくり

路

面電車・バスをはじめとする公共交通を活性化させ、その沿線に住居、商業、事業や文化施設といった都市機能を集積させる《拠点集中型のコンパクトなまちづくり》を展開する富山市。その中でも現在進められているのが、富山駅の高架下を貫く形で、駅北を走る富山ライトレールと駅南に延びる市内電車を接続する「路面電車の南北接続プロジェクト」である。

「富山駅をハブとした交通結節機能や、路面電車の利便性向上が主たる狙いです」（富山ライトレール株式会社 村上高文さん）

「沿線周辺部にお住まいの方々にとって、多様な魅力的な生活環境を形成するきっかけとなれば」（富山地方鉄道株式会社 吉川護さん）

都市圏や生活圏といった入ひとり身近なエリアをつなぐ公共交通を「串」とし、その利便性を向上させることで将来的な行政コストの抑制、進む高齢化社会への対応や漫然と広がった市街地の集約など、富山市がクリアすべき数々の課題の解決を図る。

2019年度末、富山駅を挟む路面電車の南北接続が実現



駅の南北に路面電車を走らせる両事業者が手を取り合い、市民や旅行者にさらなる利便性を提供する。

(左)富山ライトレール株式会社 経営企画部長 村上高文さん
(右)富山地方鉄道株式会社 企画部 交通政策課 吉川護さん



ガラス美術館、市立図書館やカフェ、ミュージアムショップが併設している「TOYAMA キラリ」。5層のフロアが斜めに吹き抜けており、その開放感と富山県産の木材を活用した大量のルーバーは圧巻。

規制強化ではなく、うれしくなる施策で誘導

生活だって豊かになると思います。たとえば夜、コンサートを観に行くのに公共交通を使えばお酒を飲んで帰れますし、休日に家族と買い物に行ったときだって昼間からビールが飲める（笑）。実際、市内電車利用者のデータを取ってみると、市街地で過ごす時間が15%増え、消費金額も約20%増加していることがわかっています。飲食に関しても酒類の販売が増加傾向にあつて、この3年で約20%酒類の売り上げが伸びたお

店もあるんですね。こうした気持ちの変化、ライフスタイルの変化も、かなり大きいものがあるんじゃないでしょうか」

高齢者が元気になり、若い人たちが毎日の暮らしを楽しめる街。そんなコンパクトシティ、環境未来型都市構想の狙いは、じつはもうひとつあるという。市街地に住民を呼び込むことは、未来の富山市民のためでもあるというのだ。「従来、富山市は郊外へと拡散を続けてい

富山県のおよそ30%の面積を占める富山市は、海拔0メートルから3,000メートル級の立山連峰までを有する広大な市である。人々は自動車で移動し、公共交通の利用頻度は下がり、宅地開発も郊外へどんどん広がっていた。こうした流れに逆行する形で富山市がコンパクトなまちづくり、市街地の人を呼び込む施策をあえて目指したのは、なぜなのだろうか。

「05年時点で市街地に住む人は、人口のおよそ28%でした。それが『コンパクトシティ構想』を進めてきた結果、この10年で32%ほどまで増えてきました。私たちは、この数字を20年後には42%にしたいと思っていますが、そのためには『市街地に住むといいことがあるね』と市民の皆さんに思っていたただかなきゃいけない。たとえば駅から500メートル以内に住居をつくることから補助が出るというのも、そうした試みのひとつですが、普段の

ましたが、これを市街地へと誘導することで道路の延長や整備、除雪、インフラ整備などのコストを抑えることができます。コンパクトシティ化によって都市の維持管理コストが抑えられれば、30年後の市民の財政負担は間違いなく抑えられるでしょう。

つまり街のあり方を変えることは、じつは少子高齢化が進んだ30年後の富山市民のためでもあるんです。ひとつ誤解のないように言っておきたいのですが、私たちは郊外居住を全否定しているわけでも、クルマによるライフスタイルを全否定しているわけでもありません。ライフスタイルは多様であるべきで、両方大切にすべきだと思っています。たしかに郊外に住んでおられる方にしてみれば、施策や補助など、不公平感は大いにあるでしょう。でも今これをやらなければ地価なども含め、富山市全体が地盤沈下してしまうんです。これを放置しておくことは責任ある行政運営とはいえないし、あなたのお子さん、お孫さんが困ることになる。市民の方々は、いつもそうご説明しています」

富山市内は大通りがまっすぐ走り、歩道が非常に広く取られていることでも有名だ。これは太平洋戦争の空襲で市内中心部が焼失した際、暮らしやすい都市をつくるために計画されたものだが、富山市はそれと同じことをいま、ふたたびやろうとしている。これは明確なコンセプト、確固とした信念、そして強いリーダーシップがあつてこそ、初めて可能となることだ。「戦後、区画整理に賛成してくれた人がいたから今の富山市がある。それを私たちは忘れちゃいけない。そうした過去の人たちの思いも大切にしながら、責任あるまちづくりをすることが、市としての使命だと思います。ただしあくまでも楽しく、おいしく、おしゃれに。ここが大事なところですよ（笑）」



自治体の首長にはビジョンを語り、人を引き込む力も必要。富山市のスポークスマン役としてこれ以上の適役はいないだろう。

Point!

＋αで便利におしゃれに

24時間365日利用可能なレンタルサイクル「アヴィレ」はフランスのパリで使われているのと同じシステムを導入したものだ。また、市の中心部ではいたるところに自然の花が飾られ、道行く人にやすらぎを与えている。花束を買って路面電車に乗ると運賃が無料になるサービスも好評だ。

①路面電車南北接続事業

新幹線駅舎への路面電車乗り入れは全国初。2019年度に南北接続予定。

②トランジットモール社会実験

2017年10月、歩行者と路面電車だけが通行できる「トランジットモール」の社会実験が行われた。飲食、物販、音楽・スポーツイベントが開かれるなど、賑わいと魅力ある都市空間の創出を目的とした新たな取り組みである。

2 質の高い魅力的な市民生活づくり

富

山駅から北に5km。市内でもっとも人口が多く、公共交通沿線に立地する豊田地区で、小学校の跡地を活用し、公民館や図書館分館などの公共施設と創エネ省エネに配慮した住宅街区の建設プロジェクトがスタートした。街区内の公園には防災備蓄倉庫などを備え、地域の災害対応機能を高めた。「最新設備とITを用いた『スマート』と、災害対策機能を備えた『セーフティ』をコンセプトに掲げ、持続可能な生活環境を提案しました」大和ハウス工業株式会社 銅子毅さん

「21棟の住宅すべてに太陽光発電システムと家庭用リチウムイオン蓄電池、家庭用燃料電池を搭載する予定です。エネルギーを創り、貯め、もしもに備えることで安心・安全を守ります」(同井上知則さん)

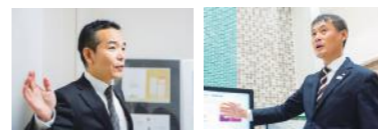
住宅に備えられた3つの電池により、街全体のエネルギー消費を実質ゼロにすることを目指す。北陸3県でこの全戸に3電池を搭載した「ネット・ゼロエネルギー・タウン」の開発は初めてとなる。

新たな暮らし方の提案が、富山市から始まる

防災連携と省エネを実現する

セーフ&環境スマートモデル街区

公共施設と戸建て分譲住宅21棟の街区を建設するプロジェクト「富山市セーフ&環境スマートモデル街区整備事業」。全戸に3電池を搭載し、まち全体のエネルギーの見える化システム「SMA×ECOクラウド」を導入することで、街で創るエネルギーと消費するエネルギーを差し引きゼロにする「ネット・ゼロエネルギー・タウン」の実現を目指す。



大和ハウス工業株式会社 銅子毅さん 大和ハウス工業株式会社 井上知則さん



公園に備えられた防災備蓄倉庫や災害時にテントを取り付けられる日陰棚、非常時には簡易トイレになるベンチなど、もしものときの防災拠点となる。



右/芝園町二丁目公園愛護会長 白木勇さん 世話役の白木さんと長田さん。子どもたちはラジオ体操の際にはミニトマトを食べたり、大根掘りをしたりしているそうだ。

左/芝園町二丁目町内会長 長田憲勇さん



子どもたちの笑顔がうれしい コミュニティガーデン

富山市芝園町二丁目公園につくられたコミュニティガーデンは、もともと古くから住む住民と新しく市街地に転居してきた住民の交流機会を増やすための工夫として、2013年3月から始められたもの。旧砂場を花壇とし、市が造成した区画では野菜作りも行っている。ミニトマト、枝豆、さつまいも、大根などを育てている。

Point!

公共交通との繋がりもカギとなる

乗車率の低い路線は本数が少なくなる、というのが常識だが、富山市の公共交通網はあくまでも市民、とくに高齢者の利便性を考えて設計、運営されている。移動したいと思ったときに装置としてそこにあることが大事だというのが、基本理念なのだ。



市内循環バス「まいどはや号」。まいどはやは富山弁でこんにちは、ありがとうなどの意。

正しい姿勢でらくらく歩ける

歩行補助車(4-Wheeled Walker)

富山大歩行圏コミュニティ研究会を中心に開発。お年寄りが使って便利なもの、まちなかに置いてシェアして使える機能などを備えている。

富山大学 大学院 医学薬学研究部 地域看護学 准教授 中林美奈子さん

「歩行が楽になれば市街地での滞在時間や楽しいことも増えると思います」と中林さん。



市役所のエントランスにも設置し、訪れる方をサポートする。

3 地域特性を充分に活かした産業振興

健

康作物であるエゴマのブランドイメージを図る富山市は、高齢化・過疎化が進んでいた山間エリア山田地域に温泉熱を活かした植物工場を設立。世界に誇る新たな特産品として、エゴマの生産・加工・流通販売までをワンストップで行う6次産業化を目指している。

「くすりの富山」のブランドイメージや、300年来の伝統産業である製菓業との連携によって、健康意識の高い女性や中高年男性に向けた新たな市場展開を進めるなど、富山市ならではの強みを活かした普及展開に力を注ぐ。また、イタリアの食科学大学との協定にもとづき、エゴマ油とオリーブ油のブレンドオイルを開発するなどグローバルブランド化も図っている。

首都圏の百貨店に催事出店するなど、販路拡大とブランド力の強化を目指す。こうした包括的な取り組みが生産性を向上させ、さらなる安定供給と自立性のある事業スキームを構築する。

自然の恵みを、富山から世界へ



大規模な露地栽培も富山市内で実施。育成方法の確立とともに、栽培エリアを市全域に拡大させることでエゴマの安定供給を目指す。



植物工場に隣接する牛岳温泉ささみねでは「エゴマ定食」(1,500円)を提供。エゴマの葉の天ぷらや実の食感を楽しめるそばなど、自然のおいしさを堪能できる。



1.工場内では栄養素、温度などすべてが管理され農業は一切使わない。エアシャワーも完備。
2.3.ヒートポンプ、太陽光発電なども活用される。



株式会社 健菜堂 代表取締役 石橋隆二さん

JC(日本青年会議所)出身で地元企業の経営者とも親交の深い石橋さん。エゴマ油の機能性にもかなり注目しているとか。

年間60万枚を生産

牛岳温泉植物工場

生食用のエゴマの葉を水耕栽培するための工場。農業は一切使わないため、生食用として最適なほか、LED照明を使うことでポリフェノール含有量も増えるという。50日で出荷でき、年間60万枚生産可能。エゴマを中心とした商品開発はもちろんだが、日本各地からの施設視察団誘致なども視野に入れた上での開発だ。「エゴマ6次産業化推進グループ」には現在、約80社が加盟している。



各再生可能エネルギー設備の発電量等データの収集および分析を行い、「見える化」を推進している。



施設を流れる二俣川のバイパス水路にマイクロ水力発電設備を導入。



農地に支柱を立てて上部空間に太陽光発電設備を設置したソーラシェアリング。営農と発電を同時に行うことができる。

再生可能エネルギーを活用

農業活性化プロジェクト

市民の農業への理解を深め、農業の新たな担い手の育成を推進するため設立された富山市営農サポートセンターの一角を利用して、2016年度より、農業用水を活用した小水力発電設備や地中熱を活用したビニールハウス、太陽光発電システムなどを一体的に整備し、再生可能エネルギーの「見える化」を図っている。多様な再生可能エネルギー設備を導入した「ショールーム」として農業者等に体感してもらうことにより、再生可能エネルギーの普及展開や農村地域の低炭素化につなげていく。



富山国際大学 現代社会学部 教授 上坂博亨さん

「多様な再生可能エネルギーを農業に活用することで、地域コミュニティを支える地産地消型エネルギー供給モデルの確立を目指します」